

T H E D A R K C I T Y

作・演出 シライケイタ

キャスト

〈現代の登場人物〉

根岸喜一郎（87）「えびす屋旅館」元主人
根岸優子（47）根岸家次女。劇作家
根岸勝（45）根岸家長男。末っ子。就職活動中
河村貴子（49）根岸家長女。主婦。浩介の妻
河村浩介（47）河村建設社長。貴子の夫
河村建設の社員達（※70年前の新聞記者役の俳優達が兼ねる）

〈70年前の登場人物〉

佐竹（42）朝日新聞、浦和支局長
阿久津（31）同、浦和支局員
田丸（28）同、浦和支局員
郷田（27）同、浦和支局員
辻（25）同、本庄通信員

（※新聞記者の中のいづれか一人を、勝役の俳優が兼ねる）

大川 本庄町会議員（※喜一郎役の俳優が兼ねる）
河村浩三 河村組組長。浩介の祖父（※浩介役の俳優が兼ねる）
河村千代子 河村浩三の妻（貴子役の俳優が兼ねる）
若き日の喜一郎（17）

〈劇中劇の人物達〉

久保田（※喜一郎役の俳優が兼ねる）
久保田の娘（※貴子役、又は、優子役の俳優が兼ねる）
和子（※貴子役の俳優が兼ねる）
美代子（※優子役の俳優が兼ねる）
三平 金太

現代と七十年前を行き来しながら物語は進む。場所も「えびす屋」の玄関口、二階の客間、公園、大川の家、河村の家、小学校の校庭等、様々に変化する為、なるべく簡潔で観客の想像力を喚起するような装置が好ましい。

二〇一八年、夏の終わり。蝉が鳴いている。埼玉県本庄市。かつては絹産業で栄え、旧中山道沿いでも最大の宿場町であったこの町も、現在は活気を失っている。以前は親不孝通りと呼ばれた駅前の飲み屋街や銀座通りと呼ばれた商店街も、若者の流出により家業を継ぐものが無く、やむなく閉店している店ばかりで、シャツター通りと化している。そんな商店街に建つ、築百年近い木造の古い建物。かつて、地元では有名な旅館「えびす屋」として営業していたが、駅前のビジネスホテルに客を奪われ、店じまいをして十年以上が経っている。その、元「えびす屋」の玄関口が幕開きの舞台。古い旅館の玄関口らしく、広い土間と、土間から上がったやはり広い板の間。板の間の奥には、家族の生活スペースがあるが、客席からは見えない。

老人が、玄関口の土間から上がった板の間に座っている。老人の名は根岸喜一郎（八十七）。日向ぼっこをしているのか、誰かを待つているのか・・・何をするともなく板の間に座っている。奥の部屋からはテレビのニュース聞こえている。（上演日当日のニュースなど、現代であることが分かるもの）。やがて、ガラガラと玄関の引き戸が開き、一人の女が入ってくる。旅行鞄を下げている。老人が女に気付く。目が合う二人。一切の物音が遠ざかり、ただ見つめ合う二人がそこにいる。長い沈黙が二人を包む・・・。

女 喜一郎 喜一郎 喜一郎

・・・

長い沈黙の後、静かに笑いだす、喜一郎。

女 喜一郎 喜一郎 喜一郎 生きていたか。

・・・うん。
いつ振りだ？

・・・お母さんのとき以来。

（先ほどより大きな声で）お母さんのとき以来。

喜一郎 何年前だ。

喜一郎 十・・・五年かな。

（先ほどより大きな声で） ん？（やはり聞き返す）

喜一郎 そうか・・・。（十五年かな。）

喜一郎 ごめんなさい。

喜一郎 元気か。

喜一郎 うん。

喜一郎 そうか。

喜一郎 お父さんも、元気そう。

喜一郎 足腰がな。

喜一郎 取り壊すんだつて？（ここ）。

喜一郎 ああ。

喜一郎 勝が連絡くれた。

喜一郎 ああ。

喜一郎 残せないの？なんとか。

喜一郎 広すぎるわ、一人で住むには。

喜一郎 ああ。

喜一郎 ああ。

喜一郎 旅館、もう一度やれないの？人雇つたりしてさ。

喜一郎 （笑）無理だよ。客なんか来ねえよ。

喜一郎 ああ・・・そつか。

喜一郎 （奥に向かつて、突如大声で）おーい、勝！優子だぞ！優子が帰つて来たぞ！

喜一郎 勝いるの？

喜一郎 ああ、あれだほら、引きこもりだ、引きこもり。

勝（45） 勝（45）が、奥から出でくる。

優子 誰が引きこもりだよ。

勝 よお、優子姉ちゃん、久しぶり。親父、テレビまた付けっぱなし。

と言いながらテレビを消しに一度姿を消す。奥の部屋から大声で、

見ないなら消しとけっていつも言つてるだろ！

勝

優子 勝

喜一郎 聞いてるんだよ！

（戻つて来て）嘘つけよ。つーか引きこもりじゃねえよ、就職活動中だよ。

喜一郎 この町に就職先なんかあるかよ。別にこの町とは限らねえよ。

喜一郎と勝のやりとりは、どこか親子漫才のようだ。

優子 勝。連絡ありがとね。

ああ。一応生まれ育った家だからさ、取り壊す前に、見ときたいかと思つてさ。

ありがとう。ねえ、ここ壊してどこ住むのよ、父さん。

貴子姉ちやんとこ。

お姉ちやんの？

うん、同居しないかつて。

・・・そう。

浩介さんも、是非つて言つてくれて。ほら、今年から陽向（ひなた）が東京の大学行つたから、部屋が一つ空いたんだって。

陽向？え？あの子、もう大学生？

ああそудよ。

えー・・・。こないだ会つた時はこんなに小っちゃかつたよ？
こないだつていつよ。

母さんの葬式んとき。

何百年前の話してんだよ。

で勝はどうするのよ？

なにが。

どこ住むのよ、勝も姉さんとこつて訳にいかないでしょ？
俺はどうにだつてなるよ。一人なんだから。

はやく嫁さんもらえ。

この町には若い女なんかいねえんだから。

若くなくたつていいだろ。婆さんならいくらでもいるだろ。

なんで俺が婆さんと結婚しなきやいけねえんだよ。

はつはつは。

姉ちゃん、しばらくいれんの？

ああ、うん。特に決めてないけど。

どこ泊まんの？ここ、来週から取り壊し始まるぜ。

あ、うん。適当に。あ、駅前にビジネスホテル出来たんだね。
もうだいぶ前だぜ。それでこちらの旅館、全滅。

・・・そつか。

うん。

お姉ちゃんは？元気？

ん？ああ。もうすぐ来るよ。

ここに？

ああ。毎日来るから、親父の様子見に。

そうなの？

(小声で) 親父、大分耳遠くなつただろ？

うん。

足腰も弱つちやつてよ、ちょっと心配してんだよ。

・・・。

こらあ！なにコソコソ話してんだあ！

(笑) なんでもねえよ。

喜一郎

優子

勝子

優子

お、珍しい。優子姉ちゃんが弱音。

何書いていいか分からなくなつちやつてさ、最近。

(笑) どうしたのよ。優子姉ちゃんらしくないぜ。

(笑) だよね。

勝 勝 勝 勝 勝 勝

そこにガラガラと玄関が開き、貴子が入つてくる。

おう貴子姉ちゃん。

(二つぶら下げた買い物袋のうち、一つを差し出し) はい、晩御飯。鯖

勝 勝 勝 勝 勝 勝

ああ、ありがとう。
あら、お客様?

優子 貴子 勝 勝 勝 勝

貴子と優子の目が合う。

・・・久しぶり。

・・・・・。

・・・何しに来たの?

いや・・・家が無くなるって言うから。

勝が連絡したの?

ん?ああ。

なんで?
え?だつて・・・

気まずい時間が流れる。

勝 勝 勝 勝 勝 勝

家捨てた人に、なんで連絡するのよ。

別に捨ててないわよ。
捨てたようなもんでしょ。

・・・。

まあまあ。取りあえずあがつたら?こんな玄関口でさ。

ほら、貴子姉ちゃん。お茶入れるから。

勝 貴子 勝 勝 勝 勝

・・・ううん。私行くわ。

(引き止めて) 姉ちゃん。

父さん、あとでうちの人来るつて。

ん?

解体の段取り話そつて。

ああ。

細かい日程とか、相談したいみたいよ。

じやあ、浩介さん来るまでいたらいいじゃん。

夕飯の支度しなきや。

家で食おうよ。せつかく優子姉ちゃん来てんだから。

・・・。

気まずい沈黙。

・・・生まれ育った家を見たいって思っちゃいけない?

・・・。

お姉ちゃん。家が無くなるのを、寂しいと思っちゃいけない?

・・・こんな時だけじゃない。

・・・。

母さんが死んだとき。家が無くなるとき。あんたが家出てから帰つて来

たの、これだけでしょ。

・・・。

もう何年? 家出て。三十年?

・・・二十八年。

二十八年。あんたが東京行つて。

・・・。

電車で二時間の距離を、二十八年で二回。

・・・。

捨てたようなもんでしょ。

・・・。

寂しがるだけなら、誰でも出来るでしょ。

・・・。

でも私たちは、生きてるの、ここで。

・・・。

沈黙。

勝

やめようぜ、久しぶりに会うんだから。

そこに、貴子の亭主の河村浩介（47）が入ってくる。河村建設の社長である。大らかな性格はいつも周囲を明るくする。

こんちはー！

ああ、浩介さん。

解体の日程決めないとね、そろそろ。

優子に気付く。

あ・・・お？

・・・おお？

おーーー！優子？おー、優子だ！

久しぶり。

どしたの？何年振りよ。

うん。家が取り壊しになるって聞いて。

おお、そう。いやあ、驚いた。（貴子に）知つてたの？

知らないわよ。

ああそうか。

元気そうね。

おお、優子も。

陽向ちゃん、もう大学生だつて？

そうだよ。あつという間だよ。東京行つちやつたよ。

うん、聞いた。

面倒見てやつてよ、東京で会つたら。

（笑）会つても分からぬわよ。こんな小つちやい時だもん、最後に会つたの。

あ、そうか。

小さく笑いあう二人。

いやあ、でも残念だよね、「えびす屋」が無くなっちゃうつてのは。

浩介

浩介

優子

浩介

優子

浩介

優子

浩介

優子

浩介

優子

浩介

優子

浩介

勝

浩介

浩介

浩介

勝

うん。

ねえ、お父さん。寂しいですね。有名な旅館だったのにね。

・・・。

あれですかよね？昔、ここが朝日新聞の拠点になつたんですね？

ん？ああ、そうだよ。

あ、本庄事件。

お、そう。

え、保険金殺人？

違う違う。それ最近でしょ？

最近つたつて、もう二十年近く経つてるぜ。

ううん。もつとずっと昔。

戦後すぐの事件だよな？

浩ちゃん、詳しい？

ああちよつとな。

ほんと？

え、なんで？

いや、ちょっと調べてて。

なに？仕事で来たの？

いや、そう言う訳じやないけど。

じやないけど、何よ。

ちよつと、興味あつて。自分の生まれ育つた町の出来事だもの。

まあまあ。俺はね、死んだ爺さんからよく聞いてたの。

そうなの？

ああ、朝日新聞だけは許せねえって。

(笑) え？なんで？

なんか大分やられたらしいんだよ、朝日に。

どういうこと？

うちの爺さん、土建屋だったんだよな、河村組つて。今俺が継いでるけ

ど。

うん。

土建屋つつても、まあ、ヤクザみたいなもんだわ、当時は。

うん。

ていうか、ヤクザだわ。

(笑) うん。

それで、なんか朝日新聞のせいで逮捕されたとか、あいつらはとんでもない嘘つきだとか、死ぬまで言つてたよ。朝日新聞だけは許さねえって。

喜一郎 なんだ、浩介お前、河村組の孫か。

ええ、そうなんですよ、実は。

浩介 面白れえ因縁だな。昔は、ヤクザだらけだつたよ、この辺り。

そうなの？

ああそりゃんだつて。そんで、うちの爺さんが関わつてた、なんか闇取引を、すつぱ抜かれたんだつて、朝日新聞に。

ほお。

それに怒つたヤクザが、その記事書いた記者をぶん殴つたんだつて。え？ 浩介さんの爺さんが？

いや、殴つたのは別のヤクザ、多分。

ふうん。

ぶん殴られた朝日新聞が、怒つたらしいんだわ。

怒つた？

ああ。浦和支局あげて、乗り込んできたんだつて、この本庄に。

え、やり返しに？

おう、そららしいよ。

マジかあ、ヤクザ相手に喧嘩かあ。

で、毎日毎日書きまくられたんだつて。

へー。

その時の取材本部が、ここ「えびす屋旅館」だつたんですよね？ お義父さん。

おう、二階の一一番奥の部屋だよ。カツコよかつたねえ。子供ながらに憧

れたね。俺も新聞記者になりたいと思つたもんだ。

皆、喜一郎の言葉を聞いている。

喜一郎

皆、生きるのに必死だつた。戦争終わつて何にもなくなつて、でも「自由」になつたつて実感だけあつてよ、ヤクザも、警察も、新聞屋も、それから普通の人達も、みーんな、とにかくその「自由」を手放してたまるかつてよ、必死に生きてた。

喜一郎、床に両手をつき、体をゆっくりと倒していく。

貴子 勝子
親父？
お父さん、どうしたの？

喜一郎、地面に耳をつける。

貴子 ちょっと、父さん。

喜一郎 こうするとな、聞こえるんだよ。

何が？

七十年前の、音がだよ。

何言つてんのよ。

この土地がよ、覚えてるんだよ。

父さん・・・。

貴子 喜一郎

貴子 喜一郎

貴子 喜一郎

貴子 喜一郎

貴子 喜一郎

皆、床に耳をつけた喜一郎を見ている。

喜一郎 本庄の大地が、覚えてるんだよ。七十年前に生きた人間達のことを。

七十年前の音が、遠くから聞こえてくる。喧騒、笑い、慟哭などがな
い交ぜになつた、人々が生きている音。
音楽が入つてくる。

喜一郎 ほら、聞こえてきた。聞こえてきたぞお！

音が高まり、時を超えて現れる、新聞記者の男達！
時間は七十年前に遡つていく。

昭和二十三年、八月十五日。旅館「えびす屋」の一室。

浦和支局長の佐竹（42）、本庄通信員の辻（25）、浦和支局の郷田（27）、田丸（28）、阿久津（31）がいる。いずれも浦和支局の敏腕である。辻は左頬に絆創膏を貼っている。

終戦から三年。戦時中は書きたいことを書けずに抑圧されていた新聞記者たちは、やつと手に入れた「書く自由」を謳歌している。故に、深刻な状況でもどこか楽しげで、生き生きしていて、大らかである。

いやいやいや、どうもこうもないでしょ。やつてやりましょうよ、ぶつ
潰してやりましょうよ、とことん。

ぶつ潰してつて、郷田君、喧嘩じやないんだからね。

田丸さん、喧嘩でしょ、こんなの。ジャーナリズムに対する宣戦布告で
しょう？パールハーバーですよ、パールハーバー。

郷田 田丸 郷田

阿久津

郷田、その例えはどうかな？趣味悪いぞ。

今日、終戦の日なんだから。

それ関係ないでしよう。

もう三年か。

いいですか？辻は記事を書いた。ペンで。どこまでも民主的、平和的行

為です。

ああそうだよ。

それに対して、相手は暴力、拳で応えた。（辻に） だろ？

はい。（頬を指して） ここをね、一発。思いつきりね。

辻君、痛かった？

痛いなんてもんじやないですよ。頭ガツーンときて、火花チカチカですよ。

僕殴られたこと無いからなあ。阿久津さんあります？殴られたこと。（答はず） しかしまあ、君も良く殴られっぱなしで帰つて來たね。

ほんとだよ。やり返せばよかつたんだよ、その場で。

いやいやいや、それで良かつたんだよ。僕たちの武器は拳じゃない。

新婚の田丸さんは黙つてください。

新婚は関係ないだろう、新婚は。悔しかつたら結婚してみなさいよ。

いや別に悔しくないですから。

はいはいはい、静かに静かに。

支局長、黙つてられませんよ、こんなのは。

うん。皆、一度落ち着こう。一度整理しよう。辻君、もう一回、事の成り行きを説明してくれる。支局で聞いた話でも、現地に来ると大分感じ方が違うからね。それからにしよう、作戦立てるのは。皆も一度冷静に、

冷静に。辻君。

はい。

辻、手帳を取り出す。

辻

あの、もう皆さんお気づきだと思いますが、駅からこの「えびす屋旅館」まで来る五分十分の間だけでも、チンピラやヤクザを沢山見かけたと思います。

怖かったねえ。

ああ。異常だよ、この街は。

田丸

阿久津

辻

ああ。異常だよ、この街は。

田丸

阿久津

田丸

阿久津

田丸

阿久津

ああ。異常だよ、この街は。

辻

はい。この本庄の街は、完全にヤクザに牛耳られていると言つて過言ではありません。脅迫、恐喝、暴行、賭博、そしてご婦人へのいたずら行為。こういったことが日常茶飯事です。

おいおい、本当かよ。

はい。この街には、大きな組が四つあります。その中で一番大きいのが河村組。表向きは土建業を営んでますが、最もたちの悪いのがこの組です。私を殴った、大川一郎という町議会議員は、この河村組の元組長です。

えー、組長？

そんなのが議員やつてんの？

はい、そうなんです。昭和十八年までに、徴兵令違反、賭博などで、前科三犯。終戦後に、跡目を今の河村浩三組長に譲つて本庄町の町會議員選挙に立候補。当選してます。

ほー。

現在の役職は、町会副議長、司法保護委員、警民協会理事長と、とにかくこの街のあらゆる役職に就いています。

阿久津 警民協会ってなんだ？

はい、警民協会というのは、警察の後援組織として、警察に住居や備品を提供したりですね、

ちよつちよつちよつ待つて、なに？ 住居？ 家？

はい、家です。今年の五月にも、三棟の家屋を警察署に寄付しています。

それだけではありません。警察署、簡易裁判所、検察庁、消防署等の建物のですね、建築修理費。これを全額支払っています。

えどういうこと？ どつから出るの、その金。

これは寄付金を募集してますね。まあ寄付金と言つても、ほとんど恐喝で集めた金ですね。警民協会は設立以降、一度も会計報告をしていません。

ん。

凄いなあ。

で、この警民協会を立ち上げたのが、なんと大川本人でして、自ら理事長になつておると、こういうわけですね。まあ警察ともズブズブですわ。

ははあ。

そして、この大川が跡目を譲つた河村組の組長、河村浩三は、大川のことを「おじき」と呼ぶほど慕つておりまして、もうこの街における大川の存在は、表からも裏からも、盤石の態勢で支えられていると言つていでしよう。

辻 田丸

辻 郷田

辻 田丸

辻 田丸

辻 田丸

辻 田丸

辻 郷田

辻 郷田

郷田 阿久津
いやあ、凄い。こりや凄いわ。
感心してどうする。

郷田 阿久津
いやあ感心するわ。倒せないんじやないすか？これ。
諦めるの早いでしよう。

田丸 阿久津
燃えるじやないのよ、相手が強ければ強いほど。

部屋の外から「失礼します」と声。

佐竹 はいどうぞ。

戸が開き、一人の青年がお茶を持つて入つてくる。若き日の根岸喜一郎（一七）である。

喜一郎 お話し中失礼します。お茶をお持ちしました。

郷田 おー、青年、ありがとうございます。
田丸 偉いなあ、お母さんのお手伝い？

喜一郎 はい。あ、根岸喜一郎です。
佐竹 暫くお世話になります。よろしくね。

喜一郎 はい。あの、朝日新聞さんがいる間は貸し切りなので気を使わないでくださいって、母が。

田丸 え、貸し切り？

喜一郎 はい。

辻 それは有難いけど、なんだか申し訳ないです。

喜一郎 いえ。母と二人なので、変な人泊めるより安心ですから。
阿久津 そうか、お母さんと一人なのかな。

喜一郎 はい。父は早くに亡くなつてるので。
阿久津 はい。父は早くに亡くなつてるので。
喜一郎 はい。父は早くに亡くなつてるので。

田丸 え、十七です。

喜一郎 おー、高校生か。

郷田 はい。

田丸 勉強、好きか。
喜一郎 本を読むのが好きで、本庄読書会に入つてます。

郷田 本庄読書会？

喜一郎 はい。本庄の学生たちで作つてる、有志の会です。大学生が多いですが、僕みたいに高校生もいます。

何やるの？読書会つて。

読書だろう、どう考えても。

あそですか。

本も読みますが、本庄の未来や、日本の未来について話し合うことが多いです。

偉いなあ、若いのに。

新聞記者になるか？

あ、凄く興味あります。

お、じやあ、朝日に入るか？

それは・・・、今回の皆さんのお仕事ぶりを拝見してから、考えたいと思つております。

お・・・、

あ、そりやもつともだ。

皆、笑つている。

田丸 じやあ、我々のお仕事ぶりを、じっくり観察して頂戴な。
阿久津 良かつたら、いつでもおいで、この部屋に。

喜一郎 いいんですか？

阿久津 ああ、いいとも。

喜一郎 ありがとうございます！

遠くから女将の声。

女将 喜一郎！なにやつてんの？邪魔しちゃダメよ！
喜一郎 はーい。じや僕行きます。何かあつたら何でも言つて下さい。
佐竹 ああ、ありがとう。

喜一郎、出て行く。

田丸 面白い青年ですね。
郷田 日本の未来は明るいか？
田丸 どうです支局長、
阿久津 ん？
佐竹 彼、本庄の通信員に。
阿久津 ああ、いいね。辻君の次は彼かな。

辻 佐竹 みつちり鍛えますよ、僕が。
阿久津 ああ頼むよ。

皆笑っている。楽しそうだ。

郷田 阿久津 それより、
郷田 阿久津 ちよつといいですよね、
郷田 阿久津 ん?
郷田 阿久津 何が?
郷田 阿久津 こここの女将さん。
田丸 新婚の田丸さんは黙つてください。
郷田 阿久津 新婚関係ないだろう。
田丸 お前ら、何をしに来てるんだ?ここに。
郷田 阿久津 未亡人と聞いて、尚更好きになつてしまいそうです。
佐竹 俺も好きだなあ、女将さん。
阿久津 支局長!

笑いあう男達。

辻 佐竹 さてと、続きやるか。辻君。

はい。事の発端はですね、約三か月前に遡ります。えーと、今年の五月、本庄駅勤務の白川という駆員がですね、自転車を止められるんですね、駅前で巡査に。

なんで?

はい、何か怪しかったんでしようね。大きな荷物を積んでたんですね、自転車の前と後ろに。

なに積んでたの?

その巡査の感の鋭い事。大当たりですわ。

だから、なにを積んでたの。

大量の銘仙だつたんです。

メイセン?

はい。絹の織物ですね。

あー、銘仙。伊勢崎銘仙。

はいそうです。それが、正規品じや無かつた。

闇か。

辻 田丸 辻 佐竹
郷田 阿久津 郷田 阿久津
郷田 阿久津 郷田 阿久津
郷田 阿久津 郷田 阿久津
田丸 阿久津

辻

はい。まあこの街で、銘仙の闇取引 자체は珍しいことじやないんだけど、その駅員に運ばせたのがですね、あ、駅員はただの使い走りだつたんですけどね、その駅員に運ばせたのが、これまた本庄の町議会議員だったんです。

また議員？

はい。

大川ではなく？

いえ、また別の、もつと小物ですね。小林って言うホントに禄でもねえな、この街は。

で、警察がちょっと調べたら、この小林が半年で八回に渡り五七〇反の銘仙の闇取引を行つてたということが分かるんです。

ほう。

額にして、実に、百三十六万円も売り上げていたんですね。

百三十六万？

はい。七〇年後の日本では一億円以上の価値になりますね。一億円？

はい。それでさすがに警察も発見してしまったからには、捜査しないわけにはいかないと。

そらそうだ。

そこで小林は起死回生の一手を打ちます。

どんな。

警察のお偉方、検察のお偉方、公安、そして各新聞の本庄通信員を招いて、宴会を開くんです。そこに私も招かれました。

あー、それがあの？

はい。もうあからさまな接待ですわ。飲めや歌えの大騒ぎ。女が隣に座つて、こう太ももに手を置いて、すり寄つてくるんですよ。

いいなあ、赴任早々いい思いしたなあ。

ちよつと、茶化さないで下さいよ。

冗談だよ。

ハツキリ言いましたからね、銘仙の闇には目をつぶつてくれと。
ほんとかよ？

本庄署の太田署長なんて酔っぱらつた挙句に、「本庄の記者なんてみんなグニヤグニヤの腰抜けだから、どうせ書けねえよ。」って言つたんですよ。警察署長がですよ。

ふうん。

うん。それで、支局に相談に来たわけだね。

佐竹 郷田

辻 郷田

阿久津

田丸 辻

田丸 辻

阿久津 辻

全員 郷田

阿久津 辻

郷田 辻

田丸 辻

田丸

辻 はい。これは書くべきではないかと。けれど、私一人の判断ではどうしていいか分からなかつたもので、支局長に相談に行きました。
それで、この記事だね。

佐竹 佐竹、八月六日の朝刊を出す。

田丸 おう、埼玉版トッヅ。

（見出しを読む）「検事、警察官招宴に疑惑 めいせん横流し事件取り調べ中に」

阿久津 でも、なんで宴会から二週間も経つてから？
佐竹 慎重にいつたんだよ。こちらの言い分だけ載せたんじゃフェアアじやないだろう。

辻 警察、公安、町民、そして銘仙業者、それぞれの言い分を取り材して、それから書きましたんで。

阿久津 なるほど。
佐竹 それと、うちだけが抜け駆けしたなんて言われないように、読売と毎日と埼玉新聞にも筋を通した。一斉に筆をとろうじやないかつてな。これは元々うちだけの特ダネではないわけだから。

田丸 でも？
郷田 他社は書かなかつた。
田丸 そう。うちだけ。
郷田 日和つたんだな、他は。

阿久津 それで、大川にぶん殴られた。
辻 はい。検察庁の新庁舎のお披露目の会場で。例の警民協会主催ですよ。その席上でいきなり。大勢の前で「あの記事はなんだ」とつて。こうやつて。

辻君、痛かつた？
田丸 痛いなんてもんじやないですよ。頭ガツーンと来て、火花チカチカです
郷田 これ聞いたな、さつきも。
辻 誰も止めてくれないんですよ。警察も。
田丸 それがいつ？
辻 八月七日です。
阿久津 一週間前か。
田丸 はい。
郷田 まだ治らないの？

辻 郷田 痛いんですよ、まだ。だらしねえな、剥がせ剥がせ。

郷田、辻の絆創膏を無理やり剥がす。

いたつ！

なんともなつてねえじゃねえか

よし分かつた。うん。

めの闘いでしよう。

ざやればハハつてもんじやなハ。やるなハ、二の矢三の矢を仕入んじか

なしと
単発では勝負にならんよ

やりましょう。これだけ支局のエース記者が揃つてゐんですから、やれ

エースだってよ。

前！

11

ないと。

？

いや、この事件は元々、きつかけがうちの記者の被害事件だから、世論

ああ、確かに。

私贋結構じやないか。

弘廣之記

私憤とは一体何かつてことだよ。社会の善悪に対する喜びや憎しみを、自分自身の皮膚に感じなくて、本当の意味での正しい報道も無ければ、人間的な仕事もできない。

おー。

そういう意味じゃ、あらゆる公憲は同時に私憲にまで高まらなければ本当じやない。だからね、今の僕たちは、言つてみれば最高のコンディションにあるんだよ。報道の自由を侵されたことに対する大きな怒りと、仲間が殴られたことに対する極めて個人的な怒りが、ない交ぜになつてるんだからね。

うん。

孤独な戦いになるよ。他社はついてこない。朝日単独の闘いだ。その覚悟はあるか。

当たり前ですよ、血がたぎつてますよ。

ええ、やりましょう。

ええ。

僕は女房に言われて、新しい下着を履いてきましたから。

皆、笑う。楽しそうだ。

佐竹 じやあ、早速始めようか。まず暴力の実態を正確に把握しよう。町の人から、暴力団から受けた具体的な被害を聞いてこられるかな。

田丸 話してくれますかね。

佐竹 粘り強くやるしかないだろう。

辻 そうですね。

佐竹 特に、大川と繋がつてゐる河村組の犯罪行為を引き出せると良いんだがな。狭い町です。被害者を探し出すのはそんなに難しくないでしょ。

田丸 単独行動は危険だ。二人一組で動いてくれ。

佐竹 よし。じやあ、俺が辻と組もう。

阿久津 じやあ俺は新婚の田丸さん。

田丸 だから、新婚関係ないだろう。

佐竹 二時間で一旦戻つてくれ。情報をすり合わせよう。

全員 はい。

佐竹

・
・
・

そこに、喜一郎が入つてくる。喜一郎に気付く佐竹。

皆、出て行く。一人残る佐竹。

佐竹 喜一郎

おう、青年。

すいません。階段の下で聞いてました。

遠慮しないで、入つて来ればよかつたのに。

白熱してたので、入りそびれました。

(笑)

カツコいいです、皆さん。

(笑) 地味な仕事だよ。

喜一郎 佐竹 読書会の仲間とも、よく話してゐるんです。この町から暴力を追放するにはどうすればいいのか。

ほう。

喜一郎 佐竹 僕たちが立ち上がりれば、大人を巻き込んで、ヤクザを追い出せるんじやないかって。

うん。

喜一郎 佐竹 でも、学生の間でも、なかなか一枚岩にはなれません。やっぱり怖いです。

うん、 そうだよな。

喜一郎 佐竹 朝日新聞が乗り込んでくるつて噂を聞いて、皆期待しています。

(笑) そうか。

喜一郎 佐竹 朝日が書きまくつてくれれば、僕たちも連携できるんじやないかって。うん、そりや面白い。新聞と学生の共闘だ。

喜一郎 佐竹 はい。明日、皆に話してみます。僕たちも本格的に戦わないかって。無理するなよ。相手は暴力団だからな。

喜一郎 佐竹 なんでこの町は、こんなに暴力団が多いんでしょうか。

喜一郎 佐竹 うん・・・。一つにはね、この土地が元々持つてる気風と言うのかな、土地柄ということがあるね。

喜一郎 佐竹 どういうことですか？

喜一郎 佐竹 ここは、江戸から明治の時代にかけて、旧中山道沿いで最大の宿場町だったのは知ってる？

はい。

宿場女郎という言葉は？

・・・。

まあ、そのまんまの意味だ。人が集まるところには金と女が集まる。はい。

金と女が集まるところには？

ヤクザが集まる？

(笑) そう！簡単な理屈だ。

佐竹

喜一郎

(笑)

カツコいいです、皆さん。

(笑) 地味な仕事だよ。

読書会の仲間とも、よく話してゐるんです。この町から暴力を追放するにはどうすればいいのか。

ほう。

喜一郎 佐竹 はう。

喜一郎 佐竹 うん。

喜一郎

それだけの理由ですか？

佐竹

もちろんそれだけじゃないけど、それが大きな理由かな。

喜一郎

はあ・・・。

佐竹

大雨で利根川が溢れると、この町は水に囲まれて離れ小島になつたらし

いんだな。そこで旅人は何日も足止め食うわけだ。

喜一郎

はい。

佐竹

その旅人の懐を狙つて、賭場が開かれる。

喜一郎

はあ。

佐竹

旅人は商売人が多いから、金は持つてる。だからどんどん巻き上げるわ

けだ。本庄は稼げるという噂が広まつて、ヤクザがどんどん集まつてくれる。

喜一郎

はい。

佐竹

あつという間に、暴力の町の出来上がりだ。

喜一郎

なるほどお。

佐竹

土地って言うのは面白くつてね、そういうた記憶とか匂いみたいなものは、何十年何百年経つても、ずっとそこに存在し続けるんだ。

喜一郎

・・・はあ。

佐竹

住む人や、風景は変わつてもね、土地の記憶はずつとそこに存在し続ける。

喜一郎

・・・はあ。

喜一郎はよく分からぬようだ。

佐竹

信じてないね？

喜一郎

いえ・・・。

佐竹

本当だよ。聞いてござらん。

喜一郎

はい？

佐竹

三百年前の、この町の記憶を、聞いてござらん。

喜一郎

・・・いや。

佐竹

聞き方が分からぬ？

喜一郎

特別に教えてあげよう。あいつらに内緒だぞ。

佐竹

・・・。

喜一郎

僕は取材に行き詰ると、時々その土地の記憶を聞くんだよ。

佐竹、その場所に横になっていき、地面に耳をつける。

喜一郎
佐竹
喜一郎
• • •。
こうやつてね。

ほら、やつてごらん。

喜一郎、戸惑いながら佐竹の真似をして横になり、地面に耳をつける。

どうだい？聞こえるかい？
• • • よく • • 分かりません。
気持ちを集中して、よく聞いてごらん。
はい • • 。
聞こえるだろう • • 。
聞こえる • • ような • • 聞こえない • • ような • • 。
目をつぶって • • 。
は、はい • • 。
はい • • 。

二人は目をつぶる。

どうだい？
喜一郎
はい • • • 聞こえる、 ような、 気が • • • します • • • はい。
佐竹
そうだろう？
喜一郎
• • • はい。
喜一郎
我々は今 • • 三百年前の本庄の大地と • • 繋がっている • • •。
佐竹
喜一郎
喜一郎
• • • はい。

二人は、地面に耳をつけて、本庄の記憶を聞いている。
ゆっくりと、暗転。

明かりがつくと、時間は現代に戻っている。

夜の若泉公園。細い川沿いの遊歩道を一人歩いている優子。

夏の終わりを告げる虫の音が聞こえている。

そこに入影が現れる。浩介である。

浩介 優子 浩介
よお。
キヤツ！
優子。俺だよ。

優子
浩ちゃん？

お
お

あー、ビックリしたあ

二〇二

八
や、
散歩。
走

ああそつか。

優子は何やつてんだよ。

ん？散歩、私も。

卷之二

二
一
○

う
ん
。

座
る
?

一瞬の間。

お姉ちゃんは？

優子

浩介

優子

浩介傳

な距離がある。 溶介は川沿いのベンチに座る。 僕子は立っている。二人の間に何気なく

浩介 ビツクリしただろ、この辺り寂れちやつて。

優子 うん。 驚いた。 駐前シヤツター通りじゃない。

浩介
ああ若い奴らが出て行くばかりだからな
どの店も今の代でお終い

う。チノ口量の映画館で全部費ひ之。次メモの故牛小浅ひては

ハ だろ。

優子

浩介 空き地が多いの気付いた？

古い建物壊すばつかで新築なんか建たねえから、空き地が増える増える。

古い建物壊すばへかで新築なんか建たれえから
空き地が増える増える

優子

浩介

そういうことか。

うち建築屋なのに、最近は解体ばつか。（笑）どうなるんだろうねえ、この町は。

昔は大宮とか高崎より栄えてたんだよね。

らしいな。

信じらんないね、本庄事件みたいなことがあったなんて。

なに、やつぱり本庄事件、書くの？いや、まだ分かんない。

そうか。

うん。

最近はどうなの、仕事の方は。

うーん・・・。

よく勝が新聞見せてくれたよ。姉ちゃんが載つてるぞつて。

（笑）そう。

ああ、今注目の社会派劇作家なんて書いてあつたじやん。

（笑）社会派ね・・・。

なんだよ。

スランプなんだよねえ。

そうなの？どうしてよ。

その社会がさ、

ん？

現実があまりに滅茶苦茶で、物語超えちゃつてるでしょ。んん？どういうこと？

現実が、ドラマよりドラマチックでしょ？今の社会が。

んー、そう？

あり得ないことばっかり起こってる。

そつかなあ・・・。

だからね、物語を書く意味つていうかね、分からなくなっちゃつてね。ふうん・・・ちょっと、よく、分かんねえなあ。

（笑）そうだよね。

あ、そうだよねつて、馬鹿にしたな。

（笑）してないよ、ゴメン。

なに、つまんなくなっちゃつたつてこと？演劇が。

・・・ううん、そうじやない。

・・・。

そういうんだけど、追い付かない。

優子

浩介

優子

追い付かない？

うん。現実に、物語が追い付かない。

ふうん。

だから、一度立ち返つてみよう、って思ったのかも。

立ち返る？

うん。私のルーツとしての、この町に。

難しいねえ、頭いい人の言うことは。

虫が鳴いている。

もうさ、社会派とかやめてさ、恋愛ものとか書いたら？

(笑)

それの方がウケるんじゃない？

恋愛ものなんて、書いたことない。

そうなの？

うん。そういうシーンすら書いたこと無いかも。

マジで？

うん。無いわ。「愛してます」とか書いたこと無いわ。

良いと思うけどなあ。

全然興味ないわ。

興味ないの？

全然ない。

えー、なんですよ？ なんで興味ないのよ。

優子は浩介を見ている。

なによ？

・・・それ聞くかあ。

ん？

浩ちゃんが、私に、それ聞くかあ。

・・・。

浩ちゃんが、私に、それ聞くかあ。

虫が鳴いている。

自分でもね、ウジウジしてるなあつて思うのよ。

優子

浩介 優子 浩介 優子 浩介 優子 浩介

浩介 優子 浩介

浩介 優子 浩介

浩介

二十八年経つても、体の深いところにね、刺さったままなの、何かが、ずっと。

あ、重たいね、私。

いや・・・。
別に今更どうこうしようつてことじゃないのよ。引きずっととか、未

綱があるとか
そういう事でもなしのよ

○ そしんの事じゆ無いの

虫が鳴いている。

優子 笑っちゃうよね。社会派劇作家とかいってさ、ちょっと注目されて、なんかで取り上げられてさ、新

か書かれるんだけどさ、実際は二十八年前の、小さな小さな思い出に、

。 。 。
帰つてきり、帰つてきり、帰つてきり、

笑つちやうよね。

月明かりが、優しく優子を照らしている。

貴子は、優子のことが羨ましいんだよ。

自由に生きてる優子がさ。

私は自由に生きてるよう見えてるのか。・・・。

浩介 優子 浩介 優子 浩介 優子 浩介

浩ちゃんはさ、ここから出たいと思つたこと無いの？

本庄から？

うん。

若い頃は思つたかなあ。
そつか。

うん。それこそ、優子が東京行つたばかりの時なんか、思つたかもな
あ。

よくここ来てたもんな。

そつか。

よくここ来てたもんな。

あ、なんてさ。

（笑）嘘でしょ。

ホントだよ。ロマンチストなんだよ、俺は。

ゴメン。見てなかつたわ。

あ、そう。

東京じや星なんか見えないから。

ああそつか。

小さく笑いあう二人。

今は、全然思わなくなつたなあ。

ん？

ここから出たいなんて。

そつか。

・・・うん。

二人、無言でしばし夜空を眺めている。
夜空を見上げる二人の間には、埋まりきらない距離がある・・・。

優子 浩介 優子 浩介 優子

私、行くね。
そう？
うん。行く。

俺もうちょっと、ここいるわ。

浩介 優子 浩介 優子 浩介

ここから出たいなんて。
そつか。
・・・うん。

優子 浩介 優子 浩介 優子

うん。ほら、ここで夜空見上げてさ、ああ、優子もこの星見てるのかな
あ、なんてさ。
（笑）嘘でしょ。

ホントだよ。ロマンチストなんだよ、俺は。
ゴメン。見てなかつたわ。

あ、そう。

東京じや星なんか見えないから。

ああそつか。

うん。

浩介 優子 気を付けて。
優子 うん。お休み。

優子は去つて行く。一人残る浩介。夜空を見上げている・・・。
そこに貴子がやつて来る。浩介、貴子に気付く。

浩介 貴子 おう。
貴子 どうしたの?
浩介 ん?
浩介 遅いから。
浩介 ん、いや・・・星見てた。
浩介 ふうん。
浩介 今日はよく星が見えるよ。
浩介 今歩いてつたの。優子?
貴子 ん?
貴子 今歩いてつたの。優子?

一瞬の間。

浩介 ん?
浩介 貴子 おお。
浩介 貴子 そう。
浩介 貴子 あ、偶然な。
浩介 貴子 ふうん。
浩介 貴子 たまたまだぞ、マジで。
浩介 貴子 懐かしくて、歩いてたんだって。
浩介 貴子 そう。
浩介 貴子 なんか大変みたいだな、ああいう仕事も。
浩介 貴子 いや・・・ほらなんかさ・・・今の世の中が、どうとかこうとか・・・
現実が?・・・物語を超えちゃつて・・・

貴子、浩介に近づき手を差し出す。浩介の言葉が途切れる。

貴子　浩介　貴子　浩介　貴子　浩介　貴子　

帰る。
ん？

たまには手でも繋いで、帰る。
(笑) マジで？

帰つて、赤ワインでも開けよう。

貴子　浩介　貴子　浩介　貴子　浩介　貴子　

ほら。
・・・。

浩介、差し出された手を握らず、ゆっくりと口を開く。

浩介　東京ではさ、
(行き場を無くした手を下ろし) ・・・ん？

東京では、星なんか見えないんだってさ。

・・・。
ほら。

浩介、夜空を見上げる。貴子もつられて見上げる。
夫婦で夜空を見上げている。

見えないんだって、星なんか。
そう・・・。

俺、この町に残つてよかつたよ。

・・・。
うん、良かつたよ。

夫婦は並んで、しばし夜空を見上げている。二人の距離は、長年連れ添つた夫婦の距離である。やがて、浩介が手を差し出し、

よし、帰ろう！
おう！

貴子、浩介の手を握る。手を繋ぎ歩いていく夫婦・・・。

舞台は、七十年前に遡つていく。

若き日の喜一郎が町中に新聞を貼つていく姿が見える。

一九四八年（昭和二十三年）八月一七日。

大川邸。辻と阿久津が、大川を訪ねている。

大川がその日の朝刊を読んでいる。読み終わり顔を上げる。

書いたねえ。

はい。書きました。

天下の朝日新聞が、何もこんな小さなことを大げさに書くことないじゃないの。

小さなこと？

ちょっと手がぶつかっただけじやないの。

ちょっと？殴ったじやないですか。

あんなの、殴つたうちに入らないよ。で、何しに来たの？これ見せに来たの？

はい。読んで頂いたうえで反論がございましたら、取材させていただこうと思いまして。

反論あつたら、載せてくれるの？

筋の通つた反論でしたら。

我々の言い分だけ載せるのは公平ではありませんから。あるよお、反論あるよお。

（メモ帳を取り出し）じゃあ、どうぞ。

これ、間違つてる。

どこですか？

僕の経歴ね、前科三犯で書いてあるでしょう。

はい。

正しくは、前科六犯だから。訂正しといて。

訂正・・・するか。

そう・・・ですね。

それとね、

はい。

（新聞を読み）こここの部分ね、「暴力団によつて、二万三千の町民がしばしばゆすりや暴行にあつてゐるが、河村組を手先に持つてゐる大川議員が毎日警察に出入りするため、町民は頼むところがなく泣き寝入りをしている」つて、これ、

はい。何か間違つてますか？

間違つてますかつて、これはデタラメだよ。

辻

大川
阿久津

大川さんが、河野組の暴力を背景にこの町を支配していること、そしてその暴力が、町民を恐怖の底に突き落としていることは、事実です。

・・・。

現在、町民への取材を進めています。河村組と大川さんの関係について、そして、河村組からどんな被害を受けたのか。これから徐々に、紙面に載ることになりますので。

大川は鼻で笑う。辻と阿久津は顔を見合わせる。
大川はなおも笑っている。

・・・。

そううまくいくかね。
はい？

金も腕力も権力も持たない君たち新聞記者に、何の得にもならんことを

ペラペラ喋る人間がいるかなと言つたんだ。

・・・反論は以上でしようか？

では、これで失礼いたします。

二人は出て行こうとする。大川は大声で呼び止める。

大川

おい！

二人、立ち止まる。

大川

お前ら、本当にやるつてのか。

さつきまでとは別人のようである。

大川

本当に、喧嘩するんだな。俺と。

辻と阿久津は顔を見合させる。辻は大川に殴られた頬に手をやる。

・・・あなたが殴ったのは、僕の顔ではありません。
・・・。

あなたが殴ったのは、ジャーナリズムであり、民主主義であり、そして人間の自由です。

辻 大川 辻

大川 辻 大川 辻

・・・。

痛がつたんですって、とつても。

どうしても、許せないんですって。

大川 辻 大川 辻

・・・。

あなたと喧嘩はしません。我々は新聞記者ですから。我々は、ただ、文字を書くだけです。そして文字は、文字のままでは、暴力には勝てません。

・・・。

大川 阿久津 大川 阿久津

・・・。

でもね大川さん、文字には人を動かす力があるんですよ。

・・・。

大川 阿久津 大川 阿久津

・・・。

お邪魔いたしました。

大川 阿久津 大川 阿久津

・・・。

二人、頭を下げて立ち去る。大川は立ち尽くしている。

大川は消え、「えびす屋」に明かり。

同じ頃。佐竹、郷田、田丸がいる。朝刊を手にしている。

郷田 田丸 郷田 田丸

・・・。

力脅迫 警察も手をこまねく

随分デカく出ましたねえ。しかも東京版。

第一弾としては上出来じやないですか？

これで町の人も、もつと口開いてくれたらいいんだけどね。

なかなか喋ってくれないんですよ。怖がつちやつて。

まあ、そうだろうな。

大川、どんな顔でこれ読みましたかね？

阿久津さん達、大川の言い分聞きに行くつて言つてたけど、反論の余地ありますか、これ。

部屋の外から喜一郎の声。

喜一郎 佐竹 喜一郎 佐竹

すいません、失礼します。

お、喜一郎君。いいよ、入つて来て。

喜一郎 はい。

喜一郎 入つてくる。

喜一郎 お話し中失礼します。お客様です。
佐竹 客?

顔を見合わせる三人。

佐竹 どんな人?

喜一郎 はい。ご婦人です。

佐竹 ご婦人?

田丸 新婚の嫁さんですか?

郷田 いやいや、来ないでしょ。

田丸 一人寝が寂しくなつて会いに来たんじやないですか?

田丸 からかうなよ。

田丸 お通しして。

佐竹 喜一郎

はい。

田丸 あの、どちら様でしようか?
田丸 婦人
千代子 田丸
千代子 千代子
千代子 田丸
千代子 郷田
千代子 あ、河村組の。

喜一郎、出て行く。暫くして、一人の女性が入つてくる。着物姿の品
のいい女性である。三人顔を見合わせる。誰の知り合いでもないよう
だ。

田丸 お初にお目にかかります。河村千代子と申します。
河村さん・・・。

田丸 はい。河村浩三の代理で参りました。

あつ・・・

田丸 あ、河村組の。
郷田 はい。主人は建設業を営んでおります。

三人の記者は眼を合わせる。すかさず佐竹が、

佐竹 はいはい、河村さん。どうされました?
千代子 こちら、朝日新聞の皆さまでお間違いないでしようか。
佐竹 はいそうです。

辻さんとおっしゃるのは、どなたですか？

辻は今外出中でして。

そうですか。

辻に何か？

銘仙横流しの記事をお書きになつたのは、辻さんですよね？

ええ、そうです。

千代子 今日の記事は、どなたが？

千代子 ああこれですか、これは複数の記者で、こここの皆で手分けして書きました。

千代子 そうですか。

千代子 あの・・・どういったご用件で。

千代子 まだ書きますか。

千代子 はい？

千代子 えっと・・・。

千代子 これでお終い？それとも、これからも書きますか？

田丸 田丸 書きますよ。記者が一人、殴られてますので。

千代子 辻さんですね？殴られたのは。

田丸 そうです。

千代子 殴つたのは、町議会議員の大川さんですね。

田丸 ええ、そうです。

千代子 しようがないわね、本当に。大川さんも、殴ることは無かつたわよね。

千代子 あの方は、昔から血の気が多いのよ。

田丸 はあ・・・。

千代子 悪い方じやないのよ。うちの人は、昔から大川さんにはお世話になつてましてね、とっても面倒見のいい方ですのよ。

千代子 あの、ご用件は？

千代子 単刀直入に申し上げますね。

千代子 はい。

千代子 もうここまでにしませんか？

千代子 はい？

千代子 これ以上やつても、お互の為にならないでしょう。

千代子 いや・・・。

千代子 元はと言えば大川さんと辻さんの、個人的な問題でしよう。新聞なんかに載せて、町を騒がせるようなことじやないでしよう。

佐竹

町を騒がすつもりはありませんが、朝日新聞はこの問題を、単に大川さんと辻の個人的な問題だとは考えていませんよ。

そういう事を荒立てるのも無いでしよう。大川さんに謝らせるなりして、辻さんの顔が立てばよろしいでしよう？

大川は謝るって言つてるんですか？

おおかわ？

いや・・・大川さんは謝ると？

私が何とかしましょう。それで、辻さんと朝日新聞さんの顔が立つようにして差し上げましょう。

河村さん。我々は、顔だとかなんだとかの為にやつているのではありますせんよ。

あら、じゃあ何のために？

もつと大きなものの為に、我々は文章を書いてるんです。

大きなもの？

田丸 報道の自由。民主主義。人々の幸福。そういったものの為にです。

千代子

お役に立てず申し訳ありません。どうぞ、お引き取り下さい。

千代子はいら立ちを隠せなくなつてゐる。

千代子 私たちは、これで上手くやつてたのよ。

千代子 はい？

千代子 この町には、河村とか大川のような人間が必要なの。

千代子 ・・・。

千代子 佐竹 一二〇軒。

千代子 佐竹 はあ・・・。

千代子 佐竹 銘仙の織子が何人いるかご存知？

千代子 佐竹 三千人。三千人よ。

千代子 佐竹 はい。

千代子 佐竹 正規の取引だけで、三千の人間が食べられるとお思い？

千代子 佐竹 どうして、全ての銘仙業者が、例外なく闇取引をしてるとお思い？

千代子 佐竹 ・・・。

千代子

食べるためでしよう。生きるためでしよう。

佐竹

あなた方は、正義の為だとか、民主主義だとか、自由だとか、高尚なこと並べたてるけれど、肝心の、庶民の生活に目が向いてますか？

千代子

この町の、繊維の闇行為をお日様の下に引きずり出して、誰が幸せになりますか。

佐竹

千代子 あなたの花形産業を衰退させて、失業者を増やすだけじゃないですか。

佐竹

千代子 そういうことまで分かって、我々に喧嘩売つてらっしゃる？

佐竹

千代子 今の本庄の町は、長い時間をかけて、一番良いようになつてゐる。町民みんなで作り上げてきたの。それを、昨日今日来たばかりの新聞屋さん、どうこう言う資格がありますか？

三人、千代子の話を聞いている。やがて田丸が・・・。

田丸

千代子 町民みんなで作り上げてきたですって？

田丸

千代子 寝言は寝てから言つてくださいよ。

田丸

千代子 なんですって？

田丸

千代子 旧態依然とした、戦前からのヤクザ組織が福利かせてるだけでしよう。

田丸

千代子 暴力でこの町を支配してただけでしよう。

千代子

郷田 あなた方は、自分達の利益の為に、大川と手を結んで議会を支配して、警察を支配して、町民を恐怖の淵に追い込んでいる。闇で儲けた金が、町の人々の手に平等に行き渡つてると言えますか？町民の生活を豊かにしていると言えますか？違うでしよう？自分たちの懐を潤してただけでしよう。詭弁もいい加減にして下さいよ。

千代子

千代子は静かに口を開く。

千代子

・・・あなた達、本当に河村組と構えるつもり？

あなた方は、本当に朝日新聞と構えるおつもりですか？

佐竹 千代子 あなた方に不當に朝日新聞の機会をおもって貰ったが、

佐竹 我々はかつて、戦わずに筆を汚したことがあります。権力に屈して、信念を曲げてしまった過去があります。

我々はかつて、戦わずに筆を汚したことがあります。権力に屈して、信念を曲げてしまつた過去があります。

はい。戦争です。開戦前には、販売部数拡大の為に開戦を煽り、戦時は大本営発表を垂れ流し、真実を伝えることをしなかった。結果、あの悲惨な敗戦を招いたんです。新聞には、大いなる戦争責任がある。なぜあの時、戦争反対と叫び続けることが出来なかつたのか。悔やんでも悔やみきれない痛切な反省の上に、我々は立つてゐるんです。ジャーナリズムは、もう決して、あそこには戻らないと決めたんです。朝日も読売も毎日も関係ない。我々ジャーナリズムは、権力や暴力の圧力には決して屈しないと、三年前に誓つたんです。やつと手に入れた、「書く自由」を、二度と手放さないと誓つたんです。だから、書きます。

千代子
佐竹 地方記者に対する一発の拳がね、大新聞を動かしましたよ。

佐竹 明日、全国版の社説に、この件が載りますから。銘仙の闇取引の実態から辻君に対する暴力事件まで、本社が大々的に取り上げることになりました。

千代子 佐竹 もう止められませんよ、この流れは。
千代子 。。。

佐竹 我々は、この町の人々と連帶します。そして必ず、暴力を追い出します。
千代子 我々の、いや、人類の未来の為にね。

「どうぞ、旦那様と大川さんによろしくお伝えください。伝えましょう。吐いた唾は呑めませんことよ。ええ、分かつてます。」

出て行く千代子。入れ替わりに、喜一郎が入つてくる。皆無言。

郷	田	佐
田	丸	竹

深い溜息の後顔を見合わせ、笑い始める男達。
笑いは徐々に大きくなつていき、やがては大爆笑になる。

田丸 郷田 御機嫌 ようですよ、御機嫌 よう。
田丸 郷田 吐いた唾は呑めませんことよ。
山田 五十鈴かと思ひましたよ。

笑い転げる男達。やがて笑いは收まり、

田丸
喜一郎
いやあ、でも言つてやりましたね、支局長カツコよかつたですよ！
人類の・・・未来の為にね。喜一郎も聞いてたか？

皆笑つてゐる。

でもね支局長、

郷田 佐竹 でもね支局長、なん?
支局長の言う通りですよ。
なにが。

我々はもう決してあそこに戻ってはいけない。信念を曲げてはいけない。手に入れた自由を手放してはいけない。そういう戦いだと思っています。本当の意味での戦後が始まるかどうか。

田丸 これは、今を生きる我々の為だけの闘いではない。三十年後、五十年後、百年後を生きる、我々の子孫の為の闘いでもあると言うことですね。
佐竹 ああ、そういうことだ。
喜一郎
・・・・。

佐竹

しかしこれで、奴らがどう出るかな。ただ黙つても思えない。

そこに、立て続けに窓ガラスの割れる音が聞こえる。

郷田 喜一郎

なんだ？

見てきます。

喜一郎、出て行く。その間も音は続いている。

喜一郎が慌てて戻つて来る。

大変です。

どうした？

ヤクザがビール瓶を・・・

田丸 喜一郎

郷田 喜一郎

佐竹 喜一郎

河村組の連中です。家にビール瓶を投げつけてます。

なに？

凄い人数に囲まれてます。

皆出て行く。無人の室内に、窓ガラスの割れる音が響く。

外で佐竹たちが「やめろ」「やめろ」と口々に叫んでる声が聞こえる。

次々に投げ込まれるビール瓶。窓ガラスの割れる音。

やがて音が遠ざかり、時は現代に。喜一郎、優子、勝、浩介がいる。

喜一郎が、優子、勝、浩介に七十年前の思い出話をしていた。

何だか祖父がすいませんね、その節は。

ホントよ。

しつかし信じられねえな、今となつては。この町でそんなことがあったた

なんて。

組長の女房はよ、ちょっといい女だったんだよ。

俺のお祖母ちゃんですか？

そうそう。

写真でしか知らないんですよね。

杉村春子みたいですよ。

え？さつき山田五十鈴って言つてたわよ。

いや、違うな、あれだ岩下志麻だ、岩下志麻。

誰でも良いよ！

勝 喜一郎

優子 喜一郎

浩介 喜一郎

喜一郎 喜一郎

勝 喜一郎

優子 喜一郎

浩介 喜一郎

喜一郎 喜一郎

喜一郎 喜一郎

佐竹 喜一郎

河村組 喜一郎

佐竹 喜一郎

河村組 喜一郎

佐竹 喜一郎

佐竹 喜一郎

佐竹 喜一郎

なに？

凄い人数に囲まれてます。

優子 喜一郎 綺麗な人だつたのね？

おおそだよ。極道の女つてのは、みんな良い女なんだよ。

そこに貴子と数人の男たちが顔を出す。

貴子 喜一郎 浩介 貴子 浩介
浩介。みんな連れてきたよ。
おう。入れ入れ。

「失礼します」と言いながら、ぞろぞろと入つてくる作業着姿の男達。七十年前の朝日新聞の記者たち（佐竹、阿久津、郷田、田丸）にそつくりである。

浩介 喜一郎 浩介 喜一郎 浩介
お父さん、紹介させてください。
ん。
うちの人間達です。

皆口々に、「こんにちは」「よろしくお願ひします」など。

浩介 喜一郎 浩介 喜一郎 浩介
来週から、このメンバーでここ解体やらせてもらいます。身内の建物つてこともあるし、歴史ある「えびす屋」さんだし、俺なりのリスクヘトの気持ちで、最強メンバー揃えました。
おおそーか。

浩介 喜一郎 浩介 喜一郎 浩介
今回、アルバイトは一切使いませんから。全員うちの社員でやりますんで。
で。

喜一郎 喜一郎 喜一郎

喜一郎、椅子から立ち上がる。

勝 勝 勝
喜一郎 喜一郎 喜一郎
お、親父大丈夫か？

喜一郎、よろよろと歩き、一人ずつ顔をじつと見ている。

勝 貴子 浩介 喜一郎
貴子 お父さん？
どうしたの？
親父？

優子 貴子
・・・あ、うん。

沈黙。

・・・親の歳も分かんないの。
貴子 姉ちゃん。
だつて・・・。

貴子 勝子

・・・
貴子姉ちゃん。
だつて・・・。

沈黙。

勝子 勝子

・・・
で、どう？久々のこの町は。
故郷に帰つて来たなあつて感じする？

沈黙。

勝子

おいおい、いつまで喧嘩してんだよ。やめようぜ、マジで。

別に喧嘩してないわよ。

お姉ちゃんが喧嘩腰なんじやない。

別に喧嘩腰じやないわよ。

今だつてあんな言い方ないじやない。

今つて何よ。

ちよつとお父さんの歳分かなかつた位で、あんな言い方ないじやない。

お姉ちゃんがそんなどから、私だつて帰つて来づらいんじやない。

え、なに、私のせい？

・・・。

え、なに？あなたが実家に寄り着かないのは、私のせいなの？
やめろつて。

沈黙。

優子 貴子

・・・
別に、お姉ちゃんのせいだけじゃないけどさ・・・。
じやないけど、何よ。

優子

・・・じゃあなんですか、

優子は言いかけて口をつぐむ。

なによ。
・・・。

じやあなんで、お母さん亡くなるまで教えてくれなかつたのよ。
なんでもつと早く教えてくれなかつたのよ。

え、なに？私がわざとあんたに言わなかつたって思つてんの？
だつてそうでしょ。分かつてたらもつと早く教えてくれたらよかつたじ
やない。

優子姉ちゃん、違うつて。葬式んときも言つただろ？あつという間だつ
たんだつて本当に。
病気が分かつた時に教えてくれたらよかつたじやない。

なに、そしたら帰つて來たつて言いたいの？
来たわよ。当たり前でしょ。

やめろつて。何百年前の話してんだよ。違うよ。貴子姉ちゃんのせいじ
やないよ。優子姉ちゃんに心配かけないようについて、俺と父さんと貴子
姉ちゃんとみんなで相談したんだつて。
・・・。

本当だつて。あんなにすぐ死んじやうなんて思わなかつたんだよ。

悪かつたよ。でも貴子姉ちゃんだけを責めるのは違うぜ。

東京出てから一度も顔見せなかつたくせによく言うわよ。

家の事も、親の事も、ずっと放つたらかしにしといて、全部私たちにやら
せといてよく言うわよ。

時々でも帰つて来てれば良かつたでしょ。それだけの話でしょ。

貴子姉ちゃんもさ、もういいよ。
時々でも顔見せてればよかつただけの話でしょ。
・・・。
・・・帰つて来れるわけないでしょ。

優子 勝子 貴子 優子 貴子 優子

貴子 優子 貴子 優子 勝子 優子

勝子 優子 貴子 優子 優子 貴子

何で帰つて来れるわけないのよ。

帰ってきて来れるわけないでしょ
だから、なんですよ。

もういいって。
お姉ちゃんに恋人寝取られて、帰つて来れるわけないでしょ！

はあ？

あんた、私が浩介寝取ったと思つてんの？

だつてそうでしょ！どの面下げて、帰つて来れるつていうのよ！

大声に驚き、浩介が戻ってきた。

どうしたの？

あ、浩介さん。
どうしたのよ。

最悪のタイミングだね。

これ以上ないって位、最悪のタイミングだね。

あれ、俺いなう方が良い？

違うよ 優子 紗と浩介が付き合ったの
あんたが東京行ってたし

「……これは……この短時間で、なにがどうなつて、こうなつてんの？」

(浩介には答える) 本當たよ 優子。私はそんなことしてないよ。

あんた黙つてて。
お、おう。おう。

優子は泣き出して いる。

だってお姉ちゃん、ずっと浩介の事好きだったでしょ？子供の頃から。それは、子供の頃の話でしょ？

でも、全然違うから。あんたたちが付き合ってる時は、何にもないから。
ああもうやめよう、この話。

ホントだぜ、マジで、何千年前の話で喧嘩してんだつーの。

もしかして、あんた、本気でずっとそう思ってたの？だから結婚式にも
来なかつたの？

・・・。
・・・。
・・・。

ちよつと勘弁してくれる？誤解だから。全くの誤解で私恨まれてたの？
・・・。

長い沈黙。優子のすすり泣く音だけが聞こえている。
沈黙を破り、やがて浩介が口を開く

・・・これさ、なんつーか・・・人生つてさ、色々あると思うのよ。

あんたが言うな。
いやいやいや、色々あるよお、家族の問題つてさ。そう簡単じやないと
思うのね。

だから、あんたが言うな！

いいじやんよ。俺だつて家族だよ。言わしてよ。

・・・。
だからさ、時間かけて、また話さない？

なにまとめてんのよ。私だつて言いたいこと沢山あるわよ。
わかるけど、一長一短では解決できないでしょ、こういうの。

沈黙。

・・・ん？一長一短？どういうこと?
・・・ん?
・・・。
ああそうかな?
浩介さん、難しい事言おうとしないでいいよ。
あ、馬鹿にした？俺の事馬鹿にした？
いや、してないすよ。でも一長一短つて・・・。いい事言おうとしてる
のに・・・台無しですよね。
うるせーよ。

四人、ほんの少しだけ笑いあう。

勝 浩介

あれ、あいつら遅いな。ちょっと見てくるわ。
はい。

浩介、部屋の奥に去る。姉弟三人が残る。ぎこちない時間が流れる。

勝 優子 貴子

・・・。

家族なんだから。

・・・貴子姉ちゃんも・・・優子姉ちゃんも・・・浩介さんも・・・俺
も・・・親父も・・・家族なんだから。

47

勝の言葉が、その場に染み込んでいく。

ただそこに居る、姉弟三人の姿。やがて・・・ゆっくりと、暗転。

若き日の喜一郎が町中に新聞を貼つている姿が見える。

一九四八年、八月十九日。「えびす屋」。

佐竹、阿久津、郷田、田丸、辻がいる。

佐竹 田丸 郷田 辻

阿久津

佐竹 郷田 田丸 辻

阿久津

佐竹 郷田 田丸 辻

阿久津

うん。まさか、ことごとく証言を取り消されるとはね。

はい。まるでうちが誤報を飛ばしたかの如くですよ。

佐竹 郷田 田丸 辻

阿久津

佐竹 郷田 田丸 辻

阿久津

佐竹 郷田 田丸 辻

阿久津

今のところ、何件きてる？訂正記事を載せろという要求は。

直接言つてきてるのは二件ですね。三十万恐喝事件の、中山道沿いの金物屋の吉田さん。それから十五万恐喝の元町会議員の清水さん。この二件です。

佐竹
阿久津
うん。

吉田さんと清水さんの言つてることは全く同じですね。「あんな話はしないない。朝日が勝手に書いたことだから、すぐにでも訂正して欲しい。」
とこうです。河村組との金のやり取りは認めていますけど、ただ貸しただけだと、決して恐喝なんかされていないと言うところも一緒です。同じように言わされてるんでしよう。

佐竹
阿久津
うん。

もう一件、二十万恐喝の金沢さんに至つては、新聞記者になんか会つたこともないと言いふらしているそうです。僕は名刺交換までしてるんですけどよ、ほら。

と言つて名刺を取り出す。

うん。まあ河村組から圧力がかかつていると考えていいだろう。
どうします？載せるんですか？訂正記事。

佐竹
阿久津
支局長。

佐竹、しばし考えてから。

佐竹
阿久津
佐竹
郷田
田丸
佐竹
阿久津
佐竹
阿久津
うんなるほど。
これは全て、間違いなく二人組で取材しているね？

はい、間違いありません。だよな？
はい。単独行動はありません。

よし、それなら、こんな要求は無視していい。
支局長、腹座つてますね。

座つてるんじゃないよ。
はい？
立つてるんだよ。

佐竹
阿久津
佐竹
阿久津
佐竹
阿久津
佐竹
阿久津

佐竹
辻

阿久津

佐竹

阿久津

立つてる？
ああ。猛烈に、腹が立つてゐるんだよ。

支局長。

佐竹

阿久津

立つてる？
ああ。猛烈に、腹が立つてゐるんだよ。
奴らは、どこまでも報道というものを馬鹿にしてる。
ああ。
記事は訂正しない。明日の見出しへこうだ。「訟明や取り消しに回る 新聞談話で後難を恐れる町民」これでいこう。
攻めますねえ。
弱みを見せたら付け込まれる。引き続き予定の取材行動を進めてくれ。
はい。我々も、少し焦ったことは確かです。一日でも早く記事にしたくて、ちょっと強引にやりすぎた。
ああ、それもありますね。
敵が敵だけに、もう少し取材対象と信頼関係を作りながらやりましょう。
特に、組長の河村が直接関わっている事件。この証言を取つて来てくれ。
はい。
皆口々に返事をして、部屋を飛び出していく。

喜一郎が町中に新聞を貼つてゐる姿が見える。
八月二一日。夜。同じく「えびす屋」
前場の五人が集まつてゐる。

やつたね。
田丸、郷田組やりました。
阿久津、辻組もやりました。
これはどちらも、間違ひなく河村が犯罪行為に直接関わつてゐる？
間違ひありません。
はい。間違ひありません。
詳しく聞かせてもらおうか。
じやあ、うちから。ここから一里ほど離れた、大里郡榛澤（はんざわ）村で取材してきました。榛澤村の久保田さんというご老人が、河村から酷い目にあつたという噂を聞きつけまして、郷田と自転車で向かいました。最初は怖がつて何も話してくれませんでしたが、本庄で暴力団撲滅の大キャンペーンを張つてると言つたら、震えながら、ポツリ。ポツリと話して下さいました。

以降、久保田の話の内容が、劇中劇として再現される。

河村、久保田、久保田の娘が現れる。河村は日本刀を持っている。

河村 河村
久保田 久保田
（首を振り）俺は何も知らん。

しらばつくれても無駄だぞ。お前以外にいるはずがねえんだ。俺はな、犬が大嫌いなんだ。お前が犬をしたことで、俺は東京の仲間に對して顔が潰れ、指をつめるか腹を切らねばならないことになつた。だから、お前の命を貰いに来た。

河村は日本刀を抜く。

久保田 久保田
娘 娘
ひい！
お父さんを殺されては、私たちは生きて行けません。命だけはお助け下さい。

親の命を助けたければ五万円出せ。

五万円！そんな大金ありません。

じやあいくらなら出せるんだ。

二万円で堪忍して下さい。

そんなはした金で命が拾えるか！

田丸 田丸
娘 娘
河村 河村
（懐から証文を取り出し）恐喝になるから証文を置いていく。これは借りた金だからな。訴えても無駄だぞ証文があるからな。それでももし訴えたら、殺すぞ。

河村

田丸

（懐から証文を取り出し）恐喝になるから証文を置いていく。これは借りた金だからな。訴えても無駄だぞ証文があるからな。それでももし訴えたら、殺すぞ。

と言つて、河村は出て行く。

田丸と郷田は、久保田と娘に話しかける。

そのまま泣き寝入りですか？

いいえ。その日のうちに、警察に相談に行きました。

そうしたら？

娘 河村組を相手にすると、後々面倒なことになる。今の世の中は物騒だからあきらめる、と言われました。

河村組を相手にすると、後々面倒らあきらめろ、と言われました。

ええ。警察でそう言われてしまつたらもう仕方がないので、諦めました。

河村とはそれつきりですか？

いいえ。それからも度々たかれました。

いくらくらいですか？

その時はよくて違いますか
五千円とか一万円とか
そういう額です

十四万五千円とられました。

十四万五千円！？

はい。

七十年後の日本では千五百万円に値する額じやないか！

久保田さん

これを、記事にしてもいいでしょうか？

それは困ります！

•
•
•○

これはあまりにも酷い。後のこと恐れている時代ではありません。我々

を信じて一緒に駆けて下さいませんか？

お父さん！

新聞社の方

ないか。

• • • ○

お父さん

久保田と娘は去つて行く。

間違いなく、書いてもいいと言つて下さつたんだね？
はへ。可度も唯忍しましぃ。

にい 作風と 研議しません。

・・・しかし酷いな。

警察もだらしないですね。

国定忠治時代だな。

佐竹
丸田
郷田
久津阿
津辻

忠治の時代だつて、もつとしつかりした十手取縄がいたでしよう。

じやあ、こつちも報告しますね。

辻 阿久津
佐竹 阿久津

ああ、頼む。

辻 阿久津

こつちは更に強烈ですよ。辻。
あ、はい。我々は、児玉郡北泉に行つて来ました。こちらは、事件の背景を少しご説明しなければなりません。

須山三平（二二）が現れる。

辻

こちらは被害者の、須山三平君二十二才です。

和子（二十四）現れる。

辻

そして三平君の恋人であります、和子さん二十四才。

美代子（十七）現れる。

辻

そして世間の噂では、三平君は和子さんの妹、美代子さん十七才とも関係があると言われ、利根川沿いなどで一人を見かけるものがあるようになつたのが今年の春のことだそうです。しかし、これが悲劇の始まりにして、この姉妹には二十六才になる金太というお兄さんがいます。

金太（三十六）現れる。

辻 田丸

そしてこの金太がなんと、河村組の組員でした。

あちやあ・・。

でもそんなことは露知らずの三平君。両手に花の乱れた青春を謳歌しておりました。しかしこれ、バレます。二股がお姉さんとお兄さんにバレて、妹の美代子さんから一緒に逃げてくれと頼まれます。そして神戸から仙台から、およそ二ヶ月の逃避行の旅に出ます。しかし、親戚を頼つていたため居場所がすぐばれ、仙台から連れ戻されます。そして、三平君は河村の自宅に監禁されることになります。そこでは、嫉妬に狂った和子さんが、美代子さんを滅茶苦茶に殴りつけます。

以下、再現。和子が美代子の髪の毛をつかんで引きずり回している。

三平は、両手を結ばれ正座させられている。金太が日本刀を、河村がピストルを手に立っている。

美代子 痛い痛い痛い痛い！！

和子 あんた、ふざけんじやないわよ！舐めた真似してんじやないよガキが！

美代子 痛い痛い痛い痛い！

和子 うるさいんだよ！！妹のくせに、妹のくせに！

美代子 痛い痛い痛い痛い！

和子、髪の毛を離す。美代子は和子から逃げる。

美代子 何すんのよ！痛いじやないのよ！

和子 あんた、人の男に手え出してんじやないわよ。クソガキが！

美代子 三平さん、姉さんより私が好きなんだつて。私の方が優しいつて。ね、

三平さん。

三平 三平

和子 美代子あんたねえ・・・いい加減にしなさいよ。

美代子 体の相性も私の方が良いんだつて。若いから、柔らかくつて気持ちいい

んだつて。

和子 お前、ぶつ殺してやるよ！

和子 ぶつ殺してやるよ！

美代子 自業自得でしょ。私の方が若いんだから。

和子 はあ！？自業自得の意味分かつてないだろ。馬鹿だろお前！

逃げる美代子、追う和子。それを見ている三平と河村。

河村がピストルを天井に向け威嚇射撃する。その音に驚き静かになる。

河村、ピストルを金太に渡し、日本刀を手にする。

金太 河村 三平 河村

三平

河村 金太 この二人は、うちの大事な組員の妹なんだ。そうだな、金太。
はい。

河村

若くしてキズものになつた姉妹二人が、一生楽に暮らせるように、二人に家を建ててやれ。

いいい、家ですか・・・。

三平

それが無理なら、姉妹を元通りの体にして返せ。

元通り・・・。

三平

当然だろう。お前がキズものにしたんだ。元通り、処女の体にして返せ。

・・・しょ、処女・・・・。

三平

それが無理なら、金で解決するしかないなあ。

・・・。

三平

三十万出せ。

河村

さささ三十万！むむむむ無理です！無理です！

三平

出来なければ、お前は、棺桶に入ることになる。

河村

かかかか家族とそそ相談させてください。かかか家族と！

再現劇の登場人物達、去る。

辻 郷田 辻 郷田 辻 田丸 辻 田丸
何と言われても、三十万なんて大金は払えるわけがありませんで、何とか押み倒して、十万円に負けてもらつたそうです。
負けてくれたなんですか？

負ってくれたみたいですよ。それでも十万円ですよ。七十年後の日本では・・・、
一千万な。
・・・。

それで、払えたのか十万円。

東京都足立区に住む親せきを頼つて、なんとか十万円を工面してもらい支払つたそうです。でもその場所で、やつぱり残りの二十万も持つてこいと言われ、断ると木刀で気絶するまで殴られたそうです。

これ、警察には届けたのかい？

はい、届けたそうです。でもこれもさつきの久保田さんの話と同じですね。諦めなさいと言われたそうです。

酷いね。監禁、恐喝、暴行。それにピストルまで撃つてる。犯罪のオンパレードじやないか。

これは、記事にすることには同意してくれてるの？
はい。是非にと。

この二つ載せたら、世論が黙つてないでしよう。
さすがに警察も動かざるを得ないんじやですか？

田丸

辻 田丸

田丸

郷田

佐竹

佐竹

阿久津

佐竹

佐竹

うん、どの角度から見ても、直にガラを持つていける事件だ。よし、書こう。

郷田

よつしや。

そこに、部屋の外から喜一郎の声。

喜一郎 失礼いたします。

田丸 おう、喜一郎か。

喜一郎 はい。

喜一郎 いいよ、入つておいで。

喜一郎 はい、失礼します。

喜一郎、入つてくる。

喜一郎 お忙しいところすみません。ちょっとよろしいでしようか。

佐竹 ああいよ。

喜一郎 ご相談がございまして。

佐竹 どうした？

喜一郎 はい。皆さんのが本庄に来てからのこの数日間、僕たち本庄読書会は、毎日のように会合を重ねてきました。

喜一郎 うん。

喜一郎 どうにか、皆さんと連帯できないかと思つて毎日、朝日新聞を町中に手分けして貼つてきました。

佐竹 ああ。知つてるよ。

辻 お陰で、町中の人達に読んでもらえてる。
田丸 表を歩いてると、沢山激励の言葉をもらうよ。君たちのお陰だよ。

喜一郎 それでですね、

喜一郎 うん。

喜一郎 僕たちの呼びかけで、本庄仲町青年団、地区労連、俳句団体「暖流」、農協、生協、教員組合、文化協会、そして消防団有志とですね、「町政刷新期成会」という団体を立ち上げることになりました。

町政刷新期成会？

喜一郎 はい。当初は、社会党や共産党の青年部も一緒にやろうとしていたんですけど、あらぬ誤解を避けるため、政党の参加を認めずに純粋の町民運動団体として出発致しました。

阿久津 ほう。立派じゃないか。

郷田

喜一郎 それで今日、その結成式があつたんです。そしてその場所で、来たる八月二十六日に、本庄小学校の校庭で町民大会を開催することに決定しました。

喜一郎 町民大会？

喜一郎 はい。

喜一郎 なにするの？ その町民大会は。

喜一郎 封建的暴力とその背後の反民主的政治勢力に対する闘争の決意表明をする大会です。

喜一郎 おー、凄いなあ。それ、学生さんが中心で？

喜一郎 はい。主に大学生と我が読書会のOBが中心です。

喜一郎 いいねえ、若い力っていうのは。

喜一郎 で？ 相談っていうのは？

喜一郎 はい。僕たちはこの町民大会を、この町から暴力を追い出すための重要なきっかけにしたいと思ってます。

喜一郎 うん。

喜一郎 その為に、なるべく沢山の町民に集まつてもらいたいと思つてるんです。ビラも沢山刷つて町中に貼りだします。

喜一郎 ああ。

喜一郎 そこでお願ひがあります。どうか、町民大会のことを朝日新聞で記事にしてもらえないでしようか。僕たちがビラを作るより、はるかに効果があると思うんです。

喜一郎 なるほど。

喜一郎 図々しいお願ひで恐縮です・・・ダメでしょうか？

喜一郎 どうですか？ 支局長。

喜一郎 ああ。大々的に宣伝しよう。

喜一郎 ありがとうございます！

喜一郎 君の話を聞いている途中から、記事にしようと思つてたよ。

喜一郎 本當ですか？

喜一郎 ああ。大々的に宣伝しよう。

喜一郎 ありがとうございます！

喜一郎 喜一郎も記者たちも嬉しそうだ。

喜一郎 大会は二十六日だつけ？

喜一郎 はい。

喜一郎 なんだ、一週間もないじゃないか。

喜一郎 佐竹 郷田

喜一郎 はい。

喜一郎 大会は二十六日だつけ？

喜一郎 はい。

喜一郎 なんだ、一週間もないじゃないか。

喜一郎

はい。皆の熱が冷めないうちに、なるべく早くやつちまおうつてことに
なつて。

阿久津

いいねえ、若いつていうのは。じゃあ、これ俺が担当しますよ。
ああ、頼むよ。

佐竹

ありがとうございます。みんな喜びます。
いよいよ本格的な共闘体制になつてきましたね、新聞と町との。
ホントですね。

田丸

ああ、我々は、今後の報道の在り方のモデルケースになれるかもしけな
いぞ。喜一郎君、一緒に頑張ろう。

喜一郎

はい！

喜一郎と記者たちが、町民大会開催のビラを町中に貼つてある姿。

八月二十三日午後。「えびす屋」。五人の記者たちがいる。

逮捕状？

本当にですか？

ああ。警察も検察も慌ただしく動いてる。

いつ出ますか？

おそらく明日には。

やりましたねえ、支局長。ついに河村組長逮捕ですよ。

それは、間違いない情報かね？

間違いありません。署長から直に聞きましたから。

はい。検察でも聞いたんで間違いないでしよう。

検察にもプライドが残つてましたね。あそこまで書かれたらやらないわ

けにいかないと。

我々の記事が、動かしましたよ。

ついに、ついにここまできた・・・。

まだまだ、初めの一歩だ。本丸はこの先だろう。

ああ、その通り。議会の不正に食い込んでいかにや。

じやあ河村の逮捕記事、いつでもいけるように作つときますね。

ああ頼むよ。しかしこれ、一つ悩みがあるな。

悩み？なんですか？悩みって。

ええ、そうなんですよ。

え？なんですか？

写真ですか？

ああそうだ。

佐竹

阿久津

田丸

阿久津

・・・あ。

河村の写真を持つてないだろう、我々は。

確かに。

写真が無けりや、肝心の記事が台無しだ。

そりやそうだ。

そうなんですよ。そう思つて帰りがけに辻と一緒に、町の写真館を回つたんです。

どこも仕返しを怖がつて出してくれません。「絶対君のところから貰つたとは言わないから」と言つても駄目ですね。

万一分かつたら火をつけられるとか、家族全員皆殺しにされるとか、穏やかじやないですよ。

五千円出すと言つても駄目でした。

五千円！？

はい。

五千円でもダメかあ。

写真館から貰うのは諦めた方が良いですね。

じやあ、直接本人に会つて撮影するしかないとこか？

そういうことだな。

「組長、逮捕された時の記事に載せる写真を撮らせてください」って言つて、撮らせてくれるか？

無理でしようねえ・・・。

うん、無理だろ・・・。

重たい空気が包む。

明日の逮捕だと言つたね？

ええ、おそらく。

ということは、記事が出るのは明後日の朝だね。

ええ。

それには遅くとも明日の昼の汽車で、本社に送らないと間に合わないね。

そういうことですね。

逮捕が午前中ならその時に撮つてしまえばいいけど、もし午後になつたら、その時撮影しても写真が載るのは一日遅れになりますね。

それはカツコ悪いですねえ。

カツコ悪いよ。

田丸 佐竹 辻 郷田 佐竹 阿久津
田丸 佐竹 阿久津 田丸 佐竹 阿久津

辻 阿久津 どうしましようね。

どうしましようもこうしましようもないだろう。

え？

撮つて来るしかないだろう。

え？直接ですか？

それしかないか。

いよいよ敵の本陣に乗り込むか。

行きましょう。その方が話が早い。

でも、何と言つて乗り込みます？朝日新聞だと言つたら会わないでしょう。

会わないどころか、殺されますよ。

朝日と言わなければいいだろ。いいじゃないか、読売でも毎日でも。

よし、出たとこ勝負で行つてみるか。

郷田立ち上がるが、佐竹が止める。

あ、郷田と田丸は、河村の奥さんに顔が割れてる。

あそだ。

え・・・てことは？

皆、阿久津と辻を見る。

俺と辻で行くしかないな。

おつかないなあ。

頑張つてこい。骨は拾つてやるから。

田丸さん、

ん？

田丸さんの新しいパンツ履いていいですか？

ああ、貸してやるよ。

皆笑う。

くれぐれも無理はするなよ。危険な目に遭いそうになつたら、すぐ引き上げるように。

はい。

二人 佐竹

辻 田丸 田丸 辻 郷田 郷田 辻 佐竹 阿久津

辻 郷田 佐竹 阿久津

辻 阿久津

その日の夕方。河村邸、居間。

河村と千代子、そして読売新聞記者のフリをした阿久津、辻が向かい合っている。

すいません、急にお邪魔しまして。

おたくら・・・本当に読売新聞かね。

阿久津
はい？

河村
本当に読売新聞かね。

阿久津
はい。本当に読売新聞です。

河村
朝日じやないでしような。

二人
・・・。

河村
もし朝日だつたら・・・。

辻
朝日でしたら？

阿久津
でしたら？

河村
緊張が走る。

河村
怒つちやうよ、僕。

阿久津
朝日ではありません。

千代子
この人たちは朝日新聞の方ではありませんよ。私がえびす屋さんにお邪魔した時には、いらっしゃいましたからね。

河村
うむ、そうか。

千代子
ええ。朝日の方々よりも、お一人の方が何と言いますか、インテリジェンスを感じますわ。

阿久津
は、恐縮に存じます。

辻
ありがとうございます。

河村
で、ご用は？

阿久津
いえ、最近の朝日新聞の一連の報道に対して、どのようにお考えか伺いたくて参りました。

ほう。

河村
辻はメモ帳を取り出す。

河村
我が社と致しましても、別の角度から一連の報道を検証しようと思いまして。

いやあ、朝日新聞は実に憎い。

河村

辻 阿久津 暴れないと下さいよお、読売ですか。

あのお、もしよろしければですね、最後にお写真を一枚。

河村 阿久津 おお、写真撮りますか。

ええ、構いませんよ。

はいはい、構いませんよ。

ええ、よろしいでしよう。

どこで撮りましょう。

はいはい、いいですよ。

ええ、よろしいですか？

じやあ、庭に出ましょか。

よろしいですか？

恐縮です、すぐ済みますから。

いえいえ、いいですよ。男前にお願いしますよ。

ええ、それはもう、任せて下さい。

四人は表へ出て行く。表から声が聞こえる。

本当に読売新聞なんですね？

ええ、本当に読売です。

朝日だつたら、大変なことですよ、これは。

朝日ではありません。

こちらでいかがですか？

ああ素敵なお庭ですねえ。

千代子 阿久津 千代子 阿久津 千代子 阿久津 千代子 阿久津

ヘチマが邪魔かしら。

河村 河村 河村 河村 河村 河村 河村 河村

四人の話す声に重なり、地鳴りのような音が遠くから聞こえてくる。それは、町民大会に集まつてくる本庄の人々の熱気である。その音はだんだん近づいて来る。

あ、じやあ先輩、ちょっと葉っぱを押さえてもらつていいですか？
お、これでいいか？

ああ、良いですねえ。暗くなつてきたので、十分の一、五分の一、二分の一と、三枚撮らせてください。
はいはい。こんな感じで良いかな？
良いですねえ、よつ色男！
はつはつは。上手いね、君。

ではまず二分の一からいきますね。動かないでくださいね。はい、撮り

ではまず一分の一からいきますね。動かないでくださいね。はい、撮りまーす。

シャツター音と共に大勢の人々の声と熱気が弾け、舞台を包む。八月二十六日。本庄小学校の校庭。町民大会が行われてゐる。

「言論の自由を守れ」

「ボスと暴力団を一層しろ」

「警察や検察長を肅正せよ」

「我々の自衛能力を世界に示せ」

「我の三日月の町」等の重複署名が並んでいた

竹林の月夜、紅葉の集落、一々の田畠を見ていふ
その数の多さに言葉が出ない。感無量の一人。

卷之三

・・・こりやあ凄いね。

リリカで集まるとは思いませんでしたね。

伺人いなど思ふ?

見当もつかない。何處かの本で、

「え、いいですか。支局長かうごうぞ

ん!!、六千つてどこかな。

そんなにいますか？人口

それ位はいるだろう。

んー、じやあ僕は五千で。

郡田が来る。興奮で息が止がつてかかる。

いやあ凄い、中山道見てきたんですけどね、途切れないですよ人の波が。
まだ集まつて来るかい？

またまた、
七
ハ千集まるんじやないですか？

卷之三

卷之二

まはまは奢りますよ。

なんすか、面白そう

一瞬で負けたよ。

あ！あとね、ついに来ましたよ。

佐竹 郷田

他社が！

来了
か

阿久津
郷田

おーーー！来たーーー！

やつと他社が後追い話事を書くことになつた事実に喜ぶ三人。三人は固い握手を交わす。これまでの孤独な戦いが報われた瞬間。

郷田 阿久津 僕が確認しただけでも、読売、毎日、埼玉、それに共同が来てます。ざまあみろ。遅いんだよな。

だから言つたんだよ最初に。共同戦線張ら
素直にやつてりや良かつたんだよ。

田丸、辻がやつて来る。やはり興奮している。

お、戻つて來た。
どうだつた。

いやあ、ひつそりと静まり返つてますよ街中は。廃墟ですよ廃墟。今日ばつかりは、町全体がこの大会の為にあるという感じですね。読売も毎日も来てるそうじやないか。

ええ。会いましたよ、そこで。ほら、最初に共闘を持ちかけた毎日の増田さん覚えてます？

ああ覚えてる。全く汚い顔してたな。
そう。あんな糞くそハ顔してた増田さんば

(笑) 世の中がここまで動いたら、もう頬かむりはできない。否が応でも書かざるを得ない。

も書かざるを得ない上
ええ、そうですよね。

あ、そう。現時点での主催者発表の人数出でますよ。
お、何人?

一万二千人ですって！

一万二千人！？

六

もっと増えるつてことだろ？

最終的には、一万四千辺りで落ち着くだろうと。

二万三千だろ？全町民。

はい。

凄いね。有権者の全員、いやそれ以上の人間がここに居る計算だね。

五人、言葉が出ない。ただ、集まつてくる人々を眺めている。

感無量で一万二千人の群衆を眺めている五人の姿・・・やがて、

・・・動きましたね。

ああ・・・動いたね。

動きましたねえ・・・。

動いたねえ。

ベンで・・・人が。

郷田
おう、学生！

喜一郎と五人の新聞記者は、握手を交わしていく。

郷田
やつたな！

皆さんのお蔭です。本当にありがとうございます！

いや、我々はきつかけを作つただけだよ。

これだけの人を動かしたのは、君たちのエネルギーだよ。

ああ、君たちが動かしたんだ。

おめでとう。

ありがとうございます。でもまだ戦いは始まつたばかりです。

そうだな。

僕たちの自由は、絶え間ない努力で勝ち取つていかなければいけない。
僕たちの未来は、僕たちの手で作つていかなければいけない。
ああ。

皆さんに教わつたことです。

壇上のマイクで話し始める議長の声が聞こえてくる。

声

「えー只今ここに、本庄町の町民大会の開催を宣言する。」

割れんばかりの拍手が聞こえる。
以下の演説の間に新聞記者達の姿は消え、舞台上は喜一郎の姿だけになる。

声

「大会宣言。今日、民主化が強く叫ばれ過去の封建的勢力は一部その姿を消したとはいへ、その勢力は依然として全国に強く根を張り、時としては政治権力と結びつき、暴力を持って民主化の前途を拒もうとしている。この度記者殴打事件から端を発した本庄事件の真相は、実にかかる保守勢力と結びついた暴力に対する我々町民の闘いに他ならない。今や我々は愛する郷土より一切のバス暴力団を追放し、民政を我らの手に取り戻すべく決起しなければならない。本日ここに歴史的町民大会が開催されるにあたり、真に民主的討論を尽くして、この町より悪の温床を根絶し、速やかに平和な本庄町を再建することを期す。右、宣言。」

喜一郎が一人暗闇に浮かび、開催宣言を聞いている。やがておもむろに、大会決議を話し出す。

喜一郎

大会決議。一つ、太田警察署長並びに幹部の罷免。一つ、飯塚検察庁事務官の罷免。一つ、警民協会の解散。一つ、公安委員の総辞職。一つ、全国的暴力団狩りの要求。以上五項目の決議を満場一致で可決。本庄の町の新しい歴史のページが始まつたのだ。我々の未来は、我々の手によつて、作つていかなければならぬ。我々の自由は、我々の絶え間ない努力によつて、これを勝ち取つていかなければならぬ。

割れんばかりの歓声と拍手が響く中、暗転。

明かりがつくと、時は現代に戻つている。

二〇一八年、秋の始まり。鮮やかな夕焼けである。

解体が終わり、更地になつた「えびす屋」跡地。

喜一郎、優子、貴子、勝、浩介、河村建設の男たちがいる。

喜一郎
浩介
おー、何も無くなつて・・・
はい。心を込めて、解体させていただきました。

頭を下げる河村建設の男達。

狭く感じるね、こうなると。

・・・うん、確かに。
寂しいね、やつぱり。

貴子 勝子 貴子 勝子
優子 勝子 貴子 勝子
・・・うん。

喜一郎がおもむろに口を開く。

喜一郎 喜一郎 喜一郎
貴子 貴子 貴子
主催者発表で一万四千・・・。

ん?

喜一郎 喜一郎 喜一郎
貴子 賽子 賽子
読売は八千。朝日は間を取つて一万。下らん綱引きやつてたんだよ、昔

から、新聞は。

(勝に)何の話?

喜一郎 喜一郎 喜一郎
貴子 賽子 賽子
あれだよ、ほら、本庄事件の時の町民大会。

ああ。

喜一郎 喜一郎 喜一郎
皆 喜一郎 喜一郎
でもなあ、確かにここにいたんだよ、彼らは。

・・・。

喜一郎 喜一郎 喜一郎
皆 喜一郎 喜一郎
ここから始まつたんだよ、この町の自由は。

・・・。

喜一郎 喜一郎 喜一郎
皆 喜一郎 喜一郎
彼ら言つてたよ、未来のための闘いだつてよ。

・・・。

喜一郎 喜一郎 喜一郎
皆 喜一郎 喜一郎
百年後の為の闘いだつてよ。

・・・。

喜一郎 喜一郎 喜一郎
貴子 賽子 賽子
お前ら、自由か、今。

お父さん?

お前ら、生きてるか、今。

親父。

喜一郎 喜一郎 喜一郎
勝子 賽子 賽子
お前ら、生きてるつて言えるか?

皆、何と答えていいか分からぬ。優子が喜一郎に歩み寄り、

喜一郎 優子
お父さん?
ん?

優子 喜一郎
私、明日帰るね、東京に。

おう、そうか。

ねえお父さん。

ん？

お芝居にしてもいい？

お父さんに聞いた話さ、私、書いてもいい？

喜一郎 ん？

お芝居作家。

どんな風になるか分からぬけど、私の生まれ育った故郷の話として、

書いてもいい？

喜一郎

喜一郎

喜一郎

喜一郎 お姉ちゃん、いい？

貴子 なんで私に聞くのよ。

勝介 それいいじやん、見てみたいよ。

浩介 それ、本庄でもやんないの？

勝介 お、いいねえ、やろうぜやろうぜ。

浩介 ほら、レンガ倉庫の二階ならやれんじやん？

勝介 あ、いいねえ。

優子 あんた達も出る？

優子 お、いいぜ！出る出る。

優子 俺も！俺、じいさんの役やるわ。ヤクザ。

優子 お、いいっすね。

河村組の男達も口々に「出る出る」と手を挙げる。

(笑) 馬鹿、冗談よ、冗談。
貴子も出ろよ。

は？いやよ、何言つてんのよ。

優子 姉ちやんも出でさ、みんなでやろうぜ。
私は無理よ、書くだけ。

やろうぜ、

やだやだやだやだ、絶対できない。声だけ出るわ、声だけ。女将さんとか。

優子 浩介 勝介 貴子 浩介 優子

なんだよ、ちょっとやる気じやん。

嘘。冗談。絶対やだ。

あそこなんかいいじやん。

なによ。

男に二股かけられる姉妹のシーン。リアル姉妹喧嘩でさ。
え？ なになに？

いや、なんでもない。勝あんた馬鹿じやないの、何言つてんのよ。

優子は勝をどつく。

勝 いてっ！

更に、何度も勝をどつく優子。

優子 勝
姉ちゃん、痛いって！
うるさい！

勝を追い回す優子。痛い痛いと逃げ回る勝。その姿は、まるでじやれ合っているように見える。それは、幼い頃の姉弟の姿・・・皆笑つて見ている。貴子もその姿を見て思わず微笑む。やがて落ち着き、勝が貴子に話しかける。

貴子姉ちゃん、俺さ・・・、
ん？

働き口、見つかってさ。

えー、ホントに？

うん。

どこ？

ほら、歴史民俗資料館、そこの。
あー、元警察署？

そうそう。今管理してる人が引退するんだって。それで新しい人探してたの。
勝、管理人になるの？
そう。本庄の歴史の管理人。

勝は誇らしげだ。皆嬉しそう。

勝 貴子

勝 貴子

浩介

勝 貴子

勝 貴子

勝 貴子

優子 勝

勝

優子 勝

優子 勝

浩介

良かつたじやない。

(優子に向かって) だから優子姉ちゃんさ、

俺達は、多分この町にずっといるからさ、

だから、たまには帰つておいでよ。

故郷なんだから、姉ちゃんの。・・・。

おう、そうだよ。

卷之三

貴子

•

貴子、やがて、小さく頷く。それを見た優子もやがて、

優子

うん。(と頷いた)

娘たちの姿を見ていた喜一郎がその場にしゃがみ込んでいく。

勝

喜一郎は地面に横たわり、更地になつた地面に耳をつ

勝喜一郎 親父。
お父さん。 ほら、聞こえるぞ。

・・・。一万人の声が聞こえるぞ。

喜一郎

聞いてみろつて。

皆どうしていいか分からず立っている。

やがて優子がその場にゆっくり横たわり、地面に耳をつける。

勝
姉ちゃん

姉ちゃん。

喜一郎
とがたじやう、聞こえながん。
優子
・・・うん・・・聞こえる。

うん聞こえる。

喜一郎、起き上がり、勝と貴子の方を向く。

喜一郎 ほら、お前らも、やつてみろつて。

戸惑っていた勝と貴子だが、やがて地面に横たわり、耳をつける。

勝喜一郎
貴子
・
・
・
・
・
・
どうだ？聞こえるだろう？
ああ・・・聞こえるよ。
うん・・・聞こえる。

それを見た浩介も横たわり、地面に耳をつける。

喜一郎 どうだ？
浩介 ・・・はい。

喜一郎、河

喜一郎
ほら、お前らも。

喜一郎、河村建設の男達の方に向き直り、

河村建設の男達も戸惑いながら、地面に耳をつけていく。喜一郎も再び横たわり、地面に耳をつける。

喜一郎 聞こえるだろう。生きてる人間達の声が。

全員、地面に耳をつけている・・・。

喜一郎 聞こえるだろう。自由の為に戦つた人間達の声が。

全員、地面に耳をつけている・・・。

喜一郎 お前ら、本当に生きてるって言えるか。

全員、地面に耳をつけている・・・。

喜一郎 お前ら、今、生きてるって、言えるか。

全員、地面に耳をつけている・・・。

夕日が、大地に横たわる人たちを優しく包んでいる。

その姿は、大地の声を聞こうとする人間達の姿であり、大地から産まれる胎児の姿であり、大地に死んでいく死者の群れにも見える。ゆっくりと、ゆっくりと、夕日は沈んでいく。

やがて・・・暗転。

二〇一八年九月二一日、脱稿

〈参考資料〉

『本庄事件 ペン偽らず』 朝日新聞浦和支局同人
『メディアは何を報道したか』 奥武則